

民家園：旧中野長治郎家住宅

旧中野長治郎家住宅は、白川村の北西端にある人里離れた加須良の集落から合掌造り民家園に移築された 3 棟の合掌造りの農家のうちの 1 棟である。この家は、1885 年に中野長治郎家の旧宅が焼失した後に建てられたものである。この地域の平均的な農家よりもやや大きく、その建築様式からはかなりの費用をかけて建てられたことがうかがえる。中野長治郎家は、1967 年に廃村になるまで加須良の名主を務めていた中野義盛家の子孫であり、比較的裕福な家庭であった。

日本の伝統的な農家によく見られるように、玄関は家畜を飼っていた土間に面している。大きな引き戸を全開にするのは馬のためだけで、人間はそこにある小さな門を使うのが普通だった。中に入ると、1800 年代後半に建てられた白川の名家の住宅によく見られるように、居間がとても広い。

奥の部屋と居間は、重厚な鴨居の下引き戸で仕切られており、この鴨居は構造全体を支える役割も果たしている。この地方で 1800 年代後半から見られる建築である。その先の畳の部屋の壁は、ベンガラと呼ばれる酸化鉄系の顔料で赤紫色に塗られている。ベンガラは日本海側の漆商人が漆の樹液を採るために加須良を訪れた際に村人に伝わり、畳の部屋の壁にベンガラを塗るのが加須良で慣例となった。